

易経に学ぶツキの真髄

自然の摂理を知り、「変」のなかに活路を覓る

中国の古典「易経」が教えるツキとはどのようなものか。三〇年以上にわたって易経を研究し、

数多くの経営者に対してアドバイスを行ってきた易経研究家がツキを呼び込むリーダーになる生き方を指南する。

易経研究家

竹村亞希子



経営者の方々とお話ししていると、「今回の仕事はツイていた」とか「ツキに見放された」となどという言葉をよく耳にします。やはり、ツキを気にする経営者は少なくないのです。

私が研究している中国の古典「易経」で考えるツキは、一般の方々が使うツキとは少し意味が違います。たしかに世の中にはツキという現象はありますが、これに頼っている、ツイている人もツキに見放された時に落胆し、ツキに振り回されてしまいます。

「易経」の考え方を知り、自然体で生

きるようになれば、ツキに左右されることなく、自らツキを呼び込むこともできるようにになります。では、どうしたらツキを呼び込むことができるようになるのでしょうか。

「兆し」は、
時の方向を知らせるシグナル

まず「易経」について説明しましょう。「易経」という書物は、「書経」と並ぶ世界最古の書とされています。そして、「時」と「兆し」について記した専門書です。この「時」とは、単な

る時間のことではなく、「あの時は〇〇で苦労した」となどという際の「時」です。つまり、環境や場所、状況、人間関係なども含んだものです。「きざし」は、「萌し」という字を当てることができ、春になって花のつぼみがふくらんだことをいう「萌し」。「兆し」はまだ現象として現れていない、隠れた物事のかすかな動きを意味します。

私たちに前もって変化を報せる「兆し」は、前兆、予兆という言葉もあるとおり、時の方向を示すシグナルで、どんな人でも、このシグナルを受け取っています。しかし、ほとんどの人は兆しに気がつきません。実際に起きた変化があつて、ようやく「あれがこの変化の兆しだったのか」と振り返るのがせいぜいです。

すべては春夏秋冬のように
変化している

近ごろ、企業の不祥事が相次いでいますが、大きな事件の前には必ず兆しがあつたはずですが、しかし、小さなクレームから始まった兆しを「たいしたことはない」ともみ消したり、見な

いふりをしたりしていたために、大問題に発展してしまつたのです。

一方、よいことも同様で、必ず兆しがあります。それに気づかずタイムシグを逃せば、せっかくの福を十分生かせないどころか、禍に転じてしまうこともあるのです。

「易経」では世の中ですべての事象は春夏秋冬のように自然の摂理に従つて変化し、同様に人間や組織、社会も変化し、と説いています。すべての物事は時が満ちてピークに達し、極まつた瞬間に変化します。冬が極まれば夏になり、陰が極まれば陽へと変化し、循環しています。一つのところにとどまつていることは決まてないのです。私たちは何か現象として現れた時が兆しだと思いがちですが、そうではありません。人生でもビジネスでも、刻々と変化する時と兆しを知り、的確な対応を心がけることが重要なのです。

「時流」を追いかけず、
「時中」を知ること

「易経」では「時中」という言葉がよく使われます。これは時に中、「その時にびつたり」という意味です。たとえば、春に種をまけば秋に実ります。冬の水の上に種をまいたら、どんなによい種でも、実るところか芽も出